

第5回伊勢・三河湾の環境と漁業を考える 豊かな海と魅力ある漁業の再生を目指して 速報

中村元彦・岡本俊治（愛知水試漁生研）・黒田伸郎（知多農林水事）・
水野知巳・藤原正嗣（三重水研鈴鹿）

標記地域研究集会は、2009年12月5日に愛知県常滑市にある鬼崎漁業協同組合で、水産海洋学会・愛知県水産試験場・三重県水産研究所の共催、愛知県漁業協同組合連合会・三重県漁業協同組合連合会の後援により行われた。参加者は試験研究機関、漁業者を中心に行政部局、一般を含め計73名であった。

主催者からの挨拶・趣旨説明の後、内湾域で人為的な環境の変化が著しかった高度経済成長期の前後に着目して、物質循環や生態系の構造の変化が反映すると考えられる水産生物の利用状況について講演と報告があった。

基調講演では、埋め立てによって多くが消失した干潟で第二次世界大戦前後まで繰り広げられた藻の利用を中心とした生活文化について、豊富な歴史的記載を基に説明があった。藻は紙や繊維素材の他、農業経営に大切な肥料等さまざまな形で利用され、アサリやキサゴ等の貝類の他、干潟に生息する多様な生物も肥料として利用されていたことが紹介された。

セッション1では、漁業の変遷について2題の報告があった。伊勢湾では1960年代に透明度は一旦減少したがその後上昇し、1980年代からはCOD・DINの減少とともに、伊勢湾南部を中心にクロロフィル濃度も低下しているが、底層の貧酸素化は改善がみられないこと、干潟を生育場とするハマグリ・クルマエビ等の漁獲量は底びき網の動力化が進んだ1950年代から1960年代がピークで、埋め立てとともに減少、底魚の漁獲量も1950年頃から減少し、底層の貧酸素化が進んだ1980年以降さらに減少していること、アサリの漁獲量は1950年代から増加したが、1990年代からは生産力の低下がみられる伊勢湾南部で減少していることが示された。また、伊勢湾底びき網漁業者からの聞き取り調査から、貧酸素水塊は観測のなかった1950年頃には発生頻度と規模が今より小さかったこと、漁獲の主体であったガザミ・クルマエビは1960年頃がピークで、その頃まではヒトデは少なく、シャコや小型のカニが肥料として漁獲されていたこと、漁業者

は近年のエビ類・カレイ類の減少に強い関心を持っていることが報告された。

セッション2では、底層の貧酸素化の影響を大きく受ける底生生物の利用の現状と問題点について2題の報告があった。伊勢湾底びき網による漁場調査から、投棄される底生生物は、棘皮動物、甲殻類、軟体動物の順に多く、棘皮動物ではヒトデ類が優先、その中で最も多いスナヒトデは春に多く出現し、貧酸素水塊が発達する夏季に減少して秋から春にかけて増加する季節変動がみられること、伊勢湾の年間投棄量は約10,000tと推定されることが示された。三河湾の漁獲の主体である貝類資源については、生息域の埋め立てで1970年頃までにハマグリや東三河地区のアサリは減少し、貧酸素化の影響を受けやすいアカガイも1970年代に大きく減少したこと、その一方で、干潟が残された西三河地区では適切な漁場管理でアサリ資源は高水準で安定し、貧酸素水塊が解消する秋以降の発生群が資源の主体であるトリガイは1970年代後半から不安定ではあるが高い水準の漁獲があることが示された。

総合討論では、基調講演と報告を基にして次のように現状を総括した。高度経済成長期の埋め立てにより干潟の浄化機能が低下したため、相対的に干潟中心の物質循環から干潟沖の平場中心の物質循環に変化した。さらに、社会的な変化で水産生物の利用が減少し、浄化機能の低下を促進した。その結果、近年生産力の低下がみられる伊勢湾南部を除いて、植物プランクトンの増加や底層の貧酸素化を促進し、生態系の多様性は損なわれ、季節・年変動が大きい不安定な底生生物相に変化した。討論では、きれいな海と豊かな海は異なり、漁業者は後者を望んでいること、魚価の低下が水産生物の利用を妨げていることが述べられた。